高宵名校宮探生月偵編乃

（仮題）

関田涙

基本.indd 1 12.6.28 9:28:11 PM

プロローグ

二〇一二年六月二十八日　公開

基本.indd　2　12.6.28　9:28:13 PM

プロローグ

「完璧な一人三役のミステリーだね」
村崎さんは、顎を上げ、目を細めると、月乃ちゃんを見下ろすようにして答えた。
その表情は、私の大嫌いな蛇が鎌首をもたげている様子を連想させて、一瞬、全身が凍りつく。
村崎さんとは、結構長いつき合いなのに、どうしても慣れないのよね。容姿も、仕草も、表情も、ファッションも、声も、口調も、何から何まで生理的に受けつけない……。
「残念ながら、私を心から満足させてくれた作品には、まだ出会っていないのだよ」
ちなみに、月乃ちゃんの質問っていうのは、「編集者として、今、どんなミステリーを求めていますか？」っていうもの。
村崎さんは、まるで用意していたみたいに、冒頭のセリフを口にしたの。
「ところで、君たちには、完璧という言葉が何を表すか、分かるかな？」
村崎さんは、みるからに説明したくて、うずうずしている様子だった。

こりゃあ、話が長くなりそうだなと思いつつ、私は首を横に振る。
「その前に、一人三役の意味が分からないわ。映画やテレビドラマなんかだと、三つ子の役を同じ俳優さんが演じて、映像を合成すると一人三役になるでしょう？」
「ふむ」
「でも、推理小説で、一人三役って何のことかしら？　同じ人物が変装して、三人の役を演じること？」
「いやいや、そうではないんだ」
村崎さんは、私の目の前で左右の手を素早く振る。
今度は、その仕草が、殺虫剤をかけられたゴキブリにみえてくる。私が苦手なものばかりを、これだけ自然に表現できちゃうなんて、ある意味すごい才能だよ。
「仕方がない。多少、長くなるが、朝丘くんにも理解できるように教えてあげよう」といって、長く伸ばした前髪を勢いよく、後方にかき上げる村崎さん。
あのさあ、仕方ないのは、こっちの方だって。村崎さんと会話したって、いいことなんか、ひとつもないもん。だったら、チンプンカンプンな数学の授業を受けてる方がまだマシだわ。
でも、まあ、今日は日曜日にしては珍しく予定が入ってな

いし、月乃ちゃんは、村崎さんの話に興味がありそうだから、つき合ってあげよっかな。

だからって、只はごめんよ。女子高生の貴重な時間を提供するんだから、それなりの報酬をいただかないとね。

「あー。話を始める前に、パフェを注文してもいいですか？

私、さっきから、とろとろメロンパフェっていうのが気になってるの。これ、新メニューみたいで、まだ食べたことがないんだ。ほら、月乃ちゃんも、遠慮しないで好きなものを頼むといいよ」

＊　＊　＊

さてと、自己紹介がまだだったわね。

私の名前は、朝丘日向。歳は十六歳で、横浜にある県立彗明高等学校の一年生。

校名を告げると、地元の人は、大抵、大袈裟に驚くの。で、その次は、私の顔を剣山のように尖った視線で満遍なく眺める。

なぜかっていうと、うちの高校って、県内の公立校のなかでは偏差値がトップクラスで、難関大学への進学率も高いからなんだ。要するに「お前みたいな知性の欠片もないような奴が、有名進学校によく受かったな」っていいたいんでしょう。

でも、本当にびっくりしたのは、むしろ私をよく知っている人たちだった。

私が合格したと知ったら、友だちも、親戚も、近所のパン屋のおじさんも、それどころか、両親や弟まで不思議がって、根掘り葉掘り質問してきた。あのときは、まるで不倫騒動の渦中にいる芸能人みたいな気分だったよ。同じような質問に何度も何度も答えなくちゃいけなくて、心底嫌になっちゃった。

「どんな勉強方法で偏差値を上げたのか？」とか、「不正な手段を使ったのか？」とか……。なかには、「今まで馬鹿のふりをしてたのか？」なんてひどいことをいう人もいた。まあ、幼稚園の頃から空手一筋で、勉強が大の苦手の私が彗明高校に入るなんて、猫が冬眠するより意外だったから仕方ないんだけどさ。

あ、そうそう。空手といえば、私は、去年、うちの流派が所属している空手連盟の全国大会に出場したの。部門は当然、女子組手個人戦よ。

日本武道館で行なわれた全国大会に出られるのは、各地区の予選を勝ち抜いた五十名。誰もが強敵で、気を抜ける試合

基本.indd 4 12.6.28 9:28:13 PM

なんてひとつもなかった。無我夢中で戦った結果、何と私は、初出場で初優勝しちゃったんだ。

しかも、史上最年少の優勝だったから、周りから相当騒がれた。本当か嘘か、怪しい外国人から、「今度、『カラテ・ガール』という映画を作るつもりだが、それに出演してくれないか？」なんて、いわれちゃったりしてね。

でも、私の夢は、こんなところで終わらない。

世界大会でチャンピオンになるまでは、心と技を鍛えまくるつもりよ。

って、空手じゃなくて、高校の話だったっけ。

全国大会で優勝したっていうと、「なるほど。朝丘は、空手で推薦入学したのか」なんて勘違いされることがあるんだけど、残念ながら、うちの高校はスポーツ推薦がないの。

つまり、私は、一所懸命、受験勉強をして、皆と同じ試験を受けて合格した。もちろん、カンニングとか身代わり受験なんてズルもしなかったわ。

体を鍛えるのは全然苦にならないんだけど、勉強は、はっきりいって地獄の苦しみで、何度も挫けそうになった。それでも、最後まで頑張れたのは、月乃ちゃんのおかげだわ。

宵宮月乃ちゃんは、小学五年生のときに、長野から引っ越してきた。それ以来、ずっと仲よしで、もちろん、これからも親友でいたいと思ってる。

彼女は、私と違って、頭脳明晰、容姿端麗、品行方正、柔和温順、秀外恵中、朱唇皓歯……って、際限なく褒め言葉で飾れちゃうような女の子なの。

つまり、成績優秀の月乃ちゃんと同じ高校に入りたかったら、猛勉強するしか選択肢がなかったってわけ。

月乃ちゃんは、自分の時間を削ってまで、私に協力してくれた。分からないところは丁寧に教えてくれたし、いい参考書をみつけると、わざわざ買ってきてくれたりしたんだよ。ま、一番大きかったのは、私が飽きたり、サボったりしないよう、図書館やお互いの家で一緒に勉強してくれたことかな。

そんな優しくて、賢い月乃ちゃんにも、たったひとつだけ弱点がある。それは、もしかしたら、人間が生活してゆく上で一番大事なものかも知れない……。

そう。彼女は、私みたいに健康な体じゃないの。

月乃ちゃんの心臓には、生まれつき穴が開いていたらしい。正確にいうと、心房中隔欠損症って病気で、右心房と左心房を隔てる壁が、きちんと形成されてなかったんだって。

小学生のとき、その穴を閉鎖する手術をしたんだけど、その後、心房細動っていう不整脈に悩まされていて、運動した

り興奮したりすると、動悸が激しくなったり、めまいがしたりしちゃうんだ。最悪、心臓麻痺や脳梗塞、腎梗塞を起こす危険もあるそうだから、油断はできないの。
そういう意味でも、私はできる限り彼女の近くにいたいって思うんだ。

本題に戻る前に紹介しておかなくちゃいけない人が残ってたわね。
今、私と月乃ちゃんの目の前にいるかなり気持ち悪い男性は、村崎真司さん。漂流社っていう中堅出版社で、文芸書の編集をしている。歳は二十六歳で、もちろん独身。
「もちろん」の意味は、彼の性格とファッションセンスを説明したら、納得してもらえると思うわ。ふだんはスーツを着てるっていうから、まだマシだろうけど、休日の今日は、バッチリ私服なの。
その凄まじさといったら、描写するのが憂鬱になるくらい……。肘当てのついたコールテンのジャケット、サイケデリックなペイズリー柄のパンタロン、真っ赤なラバーソール。首に巻いた真っ赤なスカーフは七十年代の特撮ヒーロー丸出しだし、眼鏡をかけてるくせに、ダーティ・ハリーみたいなサングラスをおでこに載せてるのもわけが分からない。

餓鬼のように痩せた体と、滑り台みたいな出っ歯は生まれつきだから仕様がないとしても、前髪が鬱陶しいくらい長い鬼太郎ヘアは社会人としてどうかと思うよ。
……。気を取り直して、先に進みましょう。
私たちは、今から五年くらい前に、従兄の紹介で知り合った。私と月乃ちゃんが小学五年生、村崎さんが大学三年生のときだったな。
といっても、別に気が合うとか、話をしていて楽しいとかいうんじゃなくて、「ミステリー」っていうキーワードで、何となくつながってるだけなの。
月乃ちゃんは、ミステリー作家志望なんだけど、観察力、洞察力、理解力、分析力、想像力、どれをとっても優秀だから、探偵としても活躍している。これまで、日常の些細な謎から、凶悪な犯罪まで、いくつもの事件を解決してきたのよ。
っていうか、なぜか、事件の方が月乃ちゃんを放っておかないのよね。
知り合った頃の村崎さんも、大学のミステリーサークルに所属していて、プロの推理小説家を目指していた。けれど、結局、作家としてデビューはできなくて、その代わりミステリーをたくさん発行している出版社に就職したの。
「入社してから気づいたのだが、作家などというものは、出

基本.indd 6 12.6.28 9:28:13 PM

版社にとって、単なる下請けの個人事業主に過ぎないのだよ。わずかな収入のために、出版社の社員に媚びへつらって仕事をもらうが、ヒットを飛ばせなければ、すぐにお払い箱になるような不安定な存在でね。しかも、代わりはいくらでもいる。幻想を抱き続けている作家志望者が、ずらーっと後ろに控えているからなあ。少しでも気を抜けば、担当者からも読者からも、あっという間に忘れ去られてしまうだろう。

もちろん、自分の書いたものが読者に幸せをもたらすこともある。人によっては、それだけで十分な満足を得られるかも知れない。だが、私は、そのために自分の人生を犠牲にしたくはないんだ。私も、いずれは結婚をし、家庭を持ちたいと考えている。それには安定した収入が絶対に必要だ。六十五歳の定年までの約四十年間をシミュレートしてみたところ、作家という職業を選択するのはギャンブルに過ぎないことが分かったのさ」

その言葉は、単なる負け惜しみじゃなかった。村崎さんは、ミステリーの編集者がまさに天職だったのよ。

入社してまだ四年目なのに、硬派な社会派ミステリーで有名な大御所作家に、官能小説まがいの変格ミステリーを書かせたり、型破りな新人作家を発掘したりで、業界でも注目されている存在になったらしい。

それは素直に尊敬しちゃうんだけど、彼は、まさに傍若無人で、自己中心の権化のような性格だから、天井を軽く突き抜けるくらい調子に乗っちゃってるのよ。とにかく顔をみれば自慢しまくりで、鬱陶しいこと、この上ないんだ。

＊　＊　＊

「ズバリいおう。一人三役とは、同じ人物が、犯人でもあり、被害者でもあり、探偵でもあるというミステリーのことである」

村崎さんは、アイスティで喉を湿らせた後、店中に聞こえるくらいの大声でいった。

ここは、私と月乃ちゃんの地元の商店街にある「モンアミ」っていうケーキ屋さん。店長さんやお店のスタッフとは昔からの知り合いだから注意されたりはしないけど、もう少し周りに気を遣ってもらいたいよ……。

「なーんだ、そういう意味か」

「それに目撃者や証人を加え、一人四役という表現をする場合もあるが、推理や論理を重んじる本格ミステリーの場合、証人の役割は微妙な場合が少なくないから、ここでは除外して考えよう」

それって、何となく分かるわ。探偵が自慢の推理を披露した後、事件の目撃者が登場して、「今の推理、全然違います。本当は、こんな感じでした」なんて説明し始めたら白けちゃうもんね。

「で、一人三役のミステリーって、結構あるんですか？」

「代表的なものに、セバスチアン・ジャプリゾの『シンデレラの罠』や、都筑道夫の『猫の舌に釘をうて』といった作品があるわ」

私が質問すると、村崎さんの代わりに月乃ちゃんが教えてくれた。

「ほう。さすが、宵宮くんだ。その辺りは、きちんと押さえているね」

村崎さんが、わざわざ私たちの地元まできたのって、多分、月乃ちゃんが目当てなんだと思う。趣味が合うってだけじゃなくて、月乃ちゃんは、とにかく半端なく綺麗だから、男の人は一目で虜になっちゃうの。

銀河のように深い瞳、どの角度からみても完璧な鼻筋、ときには目よりも複雑な表情をみせる唇。どのパーツをとっても非の打ちどころがない。腰の辺りまで達した漆黒のストレートヘアは、お嬢さまの象徴って感じだし、お化粧なんて全くしてないのに、誰よりも輝いてるの。

「しかし、残念ながら、それらの名作も、私のいう『完璧』の定義からは外れてしまうんだ」

村崎さんは、十円玉が自動販売機の下に転がってっちゃったときみたいに悲しそうな目をした。

「というわけで、私の考える『完璧』の条件を説明しようか。まず、必ず同一の事件でなければならない」

「えっと、『犯人を追いかけていた刑事が、出来心からコンビニで万引きをしちゃって、帰りの電車で財布を掏られる』なんてのはダメってことね」

「そんなものは論外だが、『連続殺人事件を扱い、第一の殺人の犯人が、第二の殺人の謎を解き、第三の殺人で被害者になる』などというものも認めない。あくまで、たったひとつの事件において、同一人物による三役を満たしてもらいたい」

それを聞いた月乃ちゃんは、わずかな間、目を閉じて、何かを考えていた。

自分に酔っている村崎さんは、それには全く気づかず先に進む。

「また、いくつか禁じ手を決めよう。第一に、記憶喪失や多重人格の設定を用いてはならない」

「犯人が一時的に記憶や人格をなくし、自分が罪を犯したことを認識せずに、探偵役を務めるといったケースですね」と、

基本.indd 8 12.6.28 9:28:13 PM

月乃ちゃんが補足する。
　記憶喪失や多重人格は、確かにフィクションで使うときは便利だけど、反面、よっぽど配慮しないと「またか」って思われちゃうわね。
「第二に、科学的な根拠のない知識や、ＳＦ的な仕掛けを使うのもダメだ。例えば、分身の術や不死身、リビングデッド（生きている死者）、幽霊、タイムマシンなんかが真っ先に思いつくだろう」
　実は殺しても死なない体だったとか、自分が殺された後、成仏せずに幽霊になって探偵をするなんて話は、漫画や小説で読んだことがある。
　タイムマシンっていうのは、説明を聞かないと分からなかったけど、一年後の自分が、二年後の自分を殺し、現在の自分がその謎を解く、なんてパターンらしい。
　これが許されると、本当、何でもありになっちゃう。で、興味はトリックじゃなくて、荒唐無稽な設定そのものとか、ストーリー展開とか、キャラクターの葛藤とかに移っちゃうからマズいんだってさ。
「第三に、変装や二重、三重生活などで、別の人物を装うのも認めない」
「それは、読者に対してでしょうか？　それとも、ほかの登場人物に対してですか？」と、すかさず月乃ちゃんが質問した。
「どちらも不可としよう」
「つまり、謎解きの際、Ａという人物は、Ｂでもあり、Ｃでもあった、というようなトリックは使用できないという意味ですね」
「ああ。それ以外なら、読者に錯覚をもたらすような記述をしようと、登場人物が知らない事実があろうと構わないさ」
「ふーん。随分、条件が厳しいのね」
「それは、当たり前だろう。何しろ私は、完璧を求めているのだからね」
　内容は段々とマニアックな方向に進んで、話についてゆくのが面倒臭くなってきた。
　ああ、とろとろメロンパフェ、早くこないかな。熟したメロンの果肉と生クリームが舌の上で出会った瞬間、トリックなんて、どうでもよくなっちゃうんだけど……。
「しかし、最も肝腎なのは次の点だよ。即ち、ミステリーとして美しくなければならない」
「はあ？　何、それ？」
「実をいうと、今まで私が述べた条件は、意外と簡単にクリアできるのさ」

「自分自身を刺して、それを隠して犯人をみつけるふりをするだけで、被害者、犯人、探偵になれますね」
背筋をすっと伸ばして、真っすぐ村崎さんをみつめる月乃ちゃん。
彼女は礼儀正しいから、誰の話でも真剣に聞いてあげるの。でも、それを好意と勘違いされたらヤバい。このキモ男は、マジでストーキングしかねないしなあ。
「宵宮くん。百点満点だよ」といって、不気味なウインクをする村崎さん。
「その場合は、自分が犯人であることを読者に隠し続けるわけだが、真相が明らかになったとしても、面白くも何ともないだろう?」
「それは書き方次第だとは思いますけど、使い古されている手であることは確かですね」
「とにかく、読者をアッといわせるものでなければ、ミステリーとして失格だ」
「はい。その点は、私も同感です。ミステリーに意外性や驚きは必要不可欠ですから」
そっかなあ。スマートで、紳士的な名探偵が登場して、私にも理解できるくらい優しく謎解きをしてくれたら、それで十分満足なんだけど……。
ああ、後、決めゼリフも欲しいかな。「私の辞書に謎という言葉はない。なぜなら、私の触れたあらゆるものは真実の光に照らし出されるからだ」とか何とかさ。
「そして、最後に、もうひとつだけ条件をつけ加えさせてもらいたい。ちょっと厳しいかも知れないが、完璧を目指すのなら、避けてとおるわけにはいかないことなんだ」
薄汚れた眼鏡の奥で、村崎さんの目が怪しく光った。
「それは、殺人事件でなければならない」
「ってことは、被害者、つまり自分が殺されちゃうの?」
「ああ。自分が自分に殺害されながら、探偵役も務めなければならないのさ」
村崎さんは、「どうだ。参ったか!」って顔で、私と月乃ちゃんをみる。そんな過酷な条件のミステリーなんて成立しっこないと思ってるんだわ。
まあ、普通は、彼の思うとおりかも知れない。だけど、謎に魅入られた稀代の美少女探偵月乃ちゃんは、村崎さんの狭くて薄っぺらい常識なんて成層圏の彼方まですっ飛ばしちゃうんだよ。

＊　＊　＊

基本.indd 10 12.6.28 9:28:13 PM

それからすぐ、お待ちかねのとろとろメロンパフェが運ばれてきた。月乃ちゃんが注文したレリジューズも一緒にやってきたから、私たちはしばらくの間、そっちに夢中になる。

それにしても、おいしいものを食べているときって、本当に幸せだなあ。天が与えてくれた至福のときを維持するためには、なるべく俯きながらパフェを口に運ばなくっちゃ。村崎さんの顔なんてみちゃったら、折角、大満足してる舌が悲鳴を上げちゃうもんね。

「ごちそうさま。とてもおいしかったです」

私は顔の前で、掌を合わせてお礼をいった。

「さてと、月乃ちゃん。あの事件が、まさに一人三役って奴じゃない？」

「あの事件……。ええ、そうね……」

私は、一応、月乃ちゃんに確認を取ってから、話を進める。

「村崎さん。私たち、その完璧な一人三役の殺人事件に遭遇しているんですよ」

あれは、今年の夏休みのことだから、今から二か月くらい前のできごとになる。

舞台は、箱根の別荘だった。

「小説じゃないのが不満かも知れませんけど、参考までに、そのときの話をしてあげましょうか？　私、推理はできないけど、何が起こって、誰がどんなことをいったかを覚えておくのは得意なの。何しろ名探偵の活躍を語るのは助手の役目だもんね」

私が親切にいってあげたのに、村崎さんは、なぜかムッとした表情になる。

「朝丘くん。大人をからかうのはやめたまえ」

「へ？」

「今、私が述べたトリックは、推理小説のなかでさえ成立するのが困難なのだよ。それが、現実に起こるはずないだろう」

「そんなこといわれたって、本当にあった話なんだから仕方ないじゃん。ねえ、月乃ちゃん」

「ええ。余りに不思議なできごとでしたから、眉に唾をつけるのも無理はありませんけど、嘘や冗談ではないんです」

「しかし、そんな奇妙な事件なら、マスコミが大きく取り上げたのではないのかな？　出版社にいる私でさえ、そんな事件は耳にしていないが……」

「一部の新聞の社会面に小さく掲載されました。けれど、そのときは事故なのか自殺なのか、それとも殺人なのか、はっきり分からなかったんです」

「そうか……。いや、しかし、いくら宵宮くんの話といえども、私には、到底信じられん……」

「じゃあ、教えてあげなくてもいいのね。私は、その方が楽だからよかったわ。ねえ、月乃ちゃん。この後、映画でもみにいこうよ」
「いいわね。ちょうど今、シアター・カナリーで、ニカラグアのサンディニスタ革命を扱った映画をやっているの」
「あ、あの……、さすがに、私、それだと五分もかからないで熟睡しちゃうんだけど……」
　なんて会話を始めた途端、村崎さんは目をギュッとつぶったまま、叫んだ。
「待ちたまえ、君たち！」
「何ですか、大声を出したりして？」
「その事件のあらましを聞かせてもらおう」
「あ。やっぱ、知りたいんだ」
　まあ、村崎さんにはパフェをおごってもらっちゃったし、月乃ちゃんには悪いけど、サンデー何とかの映画よりはマシかな……。
「いいわ。それじゃ、私と月乃ちゃんが、あのおぞましい別荘に到着したところから始めましょうか」
「あーっ。ちょっと待ってくれ」
「何よ、うるさいわね」
　キンキンに冷えた水をぐっと飲み干し、咳払いをひとつしたところで、村崎さんが両手をバタバタさせる。全く、あんたは駄々っ子かっつうの。
「君が、これから話そうとしているのは、同じ人物が犯人であり、被害者であり、探偵であった事件なんだろうね」
「んもお。しつこいなあ」
「いや、大切なことだから、確認しておきたいんだ。しかも、それは間違いなく殺人事件なんだね」
「さっきから、そうだって、いってるじゃない」
「ふふふふふ」
　私が思いっ切り怖い顔をしたのに、村崎さんは、逆に勝ち誇ったような笑い声を上げた。
「朝丘くん。それを先にバラして、どうするんだ。被害者イコール加害者なのだから、事件が起きた瞬間に、犯人がバレてしまうではないか。うーむ。やはり、そんなものはミステリーになりそうもないな」
「それは大丈夫です」
　月乃ちゃんが、初夏の高原の風みたいに涼しげに微笑む。
「へ？」
「ひなちゃんの話を聞いてもらえれば分かりますが、あの事件は、私にも最後まで真相がみえませんでした。それはまるで、よくできた推理小説のように……」

続きはいつか自費出版する予定です。気長にお待ちください。

基本.indd 12 12.6.28 9:28:13 PM